

第十五号

「地歌に生きる」

メルマガ noichi 第十五号。今月のテーマは『地歌に生きる』。

我が地歌の世界では、まさに地歌を仕事として生計を立てている人がいます。そんな努力家の日頃の労をねぎらい、敬意を表したく、メルマガ noichi 今号に取り上げました。学生三曲の星・池上眞吾氏、生粋の地歌演奏家・菊央雄司氏、頑張り屋さんの久松彩子（雅紗恵）氏のお三方をお迎えし、メルマガ noichi 十五号を整え、読者のみな様へお送りさせていただきます。

好きなことを仕事に出来るのは、とても幸せなこと。
好きなことを仕事にする為には、人一倍の努力、そしてその分野における才覚が求められてくる分けですが、特に、前者なくして大成したという前例を私は今まで聞いたことがありません。まあ、本人がその鍛錬を努力と思っただかどうかは、別ですが。

様々な分野のいわゆるサクセス・ストーリーを私なりに集約してみると、一つの共通点がありそう。それは『出会い』による転機の話。やはり夢を叶えるのには、自らの努力を認めてくれる人との出会いが、大切な条件の一つなのかもしれません。

しかし今回ここで問題にしたいのは、才能や努力、出会いがあっても、『私の好きなこと』がプロとして成立する分野であるかどうかという、大きな問題について一石を投じます。

例えば、熱戦が記憶に新しいロンドン五輪。四年越しの思いを掛けた選手の一生懸命な姿に沢山の感動が生まれましたが、あの五輪競技の中で、現在プロとして認められているものは、果たして幾つあったでしょうか。テニス、サッカー、バレーボール、バスケットボール…。陸上短距離のウサイン・ボルトや、女子棒高跳びのエレーナ・イシンバエワのようなスーパースターは例外として、それ以外の競技の殆どの選手が普段は別の仕事をしながら、上手に時間を使って競技の練習や試合に臨んでいるそうです。その条件下で世界トップレベルになるうというのですから、何とも腑に落ちない話。世界トップクラスの能力を有しているながらも、それを仕事に出来ないというこの大きな問題は、選手をバックアップする国はもちろん、関連協会、企業スポンサーのあり方、橋渡しをするマネージメント能力の低さなど、様々な問題を世間に露呈している現実があるのです。

さて、邦楽はどうなのか。邦楽はプロとして成立し得る分野か否か。時代に順応した新しい家元制度の形は何なのか。私はこの業界から、もともと沢山のプロフェッショナルが生まれる為の環境作り、今、全身が燃えています。一人でも多くの愛好家が育ち、情熱に燃えて大好きな芸に励むこと。それが仕事に繋がってゆくこと。道は必ず開ける。私は、そう信じて止みません。

昔むかしの曲に惹かれて

宮城会 地歌箏曲演奏家 池上 眞吾

はじめまして、生田流宮城会の池上と申します。

現在、演奏・作曲・指導・etc.の活動を…なんて書くところエラそう(笑)ですが、自分なりに一生懸命やっております。

さて、皆様の中には私の作品をご存知の方がおられるでしょうか？

実は今までに250曲ほど作曲し、中にはCD収録曲や公刊譜化された曲もあります。

どの曲も、出来はともかく私には財産です。

しかし、作曲家である私の思いと、弾いて下さる方々の好みは必ずしも一致する訳ではありません。私が気に入っている曲ほど再演の機会があまりなかったり…。

例えば、以前発表したCD「五臓六腑」収録のフツ飛んだ楽曲『電気カミソリの唄(細田明宏作詞)』では実際に髭を剃る音を録音し、方向性としては、私がこよなく愛する漫画家、吉田戦車のシニールでナンセンス？な笑いのセンスを狙いましたが、CD発表以来一度も再演されたという話を聞きません(笑)

このCDの一曲目は『五臓六腑(細田明宏作詞)』という三絃の歌物で、地歌の「作物」を意識した現代人にも分かる内容の曲です。

近年、プロアマ問わず、三絃愛好家の古曲離れが話題になります。江戸時代から長い年月を経て現代に残った古曲は魅力に溢れています。

でも普段から馴染みのない人達には、非日常の世界であり、いきなり「良さを分かれ」と言ってもそれは無理なお話！

一方私はいえ「好きこそものの」というわけで(腕の方はさて置き)地歌箏曲愛好家を自負しております。

もちろん多くの作曲家の先生が発表されてきた作品にも大好きな曲は沢山あります。

でも、古曲を弾くと「やっぱこの楽器はこれだな」と自然に

納得してしまいます。

箏や三絃をされる皆様には、ぜひ楽器のルーツを知って頂きたい！

そこで、弾いてみなければ中々分からない古曲の面白さを身近に感じて頂く事に繋がればと、現代感覚で楽しめる(であろう)歌の曲を積極的に作りました。

皆様も色々なアイデアで地歌箏曲の魅力を広めてください。本物を聞く耳を持った愛好家が増えてゆくのは素晴らしいことです。

もちろん古曲だけではなく様々な音楽ジャンルで活躍できる邦楽器の魅力を伝えるべくこれからも活動を続けて参ります。

どこかでお目にかかった折には気軽に声をおかけください。

音楽や芸術で生活しているのか…

琴友会 地歌箏曲演奏家 菊央 雄司

私の大学卒業論文がこのテーマでした。経済学部なのにあまり学部に関係ない論文でしたが、企業メセナの支援、昔で云う「最前ひいが

いれば生活は出来るという結論で締めた覚えがあります。

実際はプロの演奏家として生きてきて現在なお、常につきまとう切迫したテーマです。それでも、リサイタルを隔年で開催したり自ら舞台で演奏する機会を作ろうと思う原動力は、師匠が舞台上で最高のパフォーマンスを見せて下さる背中をみて、いつの日か師匠を越えたいと思うからです。

このように考えられるようになった



のも、実は最近のことであり、数年前には仕事が全くない月もあり生活困窮の不安から、兎に角出来る限りスケジュールを埋め仕事をしておりましたら、その結果師匠の元へお稽古に通う時間もとれず、自分は何の為にこの道に進んだのか、解らなくなり、本当にこの仕事で良いのかと、思い悩んだ時期がありました。

そんなときに、ある尺八の先生との出会いが道を開けてくださいました。

その先生はセミプロなので演奏以外に本職を持たれているにも関わらず、お金が無くても幸福だということをつくりと教えて下さいました。

社会にはお金が多ければ多いほど幸福だという考えがあり、何かを手に入れることが幸せだという考えがあります。しかし

私はその先生との交流を通して自分が幸福だと感じる事が出来ることこそが大切なのだと思えるようになり、そこから肩の力が抜けました。この道を選べたことも幸福であり、生徒さん達や子供たちに地歌という昔の演奏家の音楽や心を伝えていけることにも幸福を感じることができ、少なからず他人の為に働くことが出来るこの仕事を誇りに思えるようになりました。

多くの人と関わることで自分を成長させていける事が出来て、また自分一人ではなく、いろんな方々に支えて頂いて成立する、素晴らしい職業だと思っております。

*メセナ(mécénat)とは、企業が主として資金を提供して文化、芸術活動を支援することである。

現在では「企業の行う芸術文化支援」から、教育や環境、福祉なども含めた「企業の行う社会貢献活動」と、広義の解釈でも使用されている。(ウィキペディアより抜粋)

古典のお稽古

正派邦楽会 地歌箏曲演奏家 久松 彩子

今回こちらに書かせて頂くにあたり、自分の勉強を振り返って見ようと、数年前の組歌と地歌のお稽古を録音したものを聴いてみました。言われていることは毎回同じで、「目で弾かない」「楽譜を弾かない」でした。

お恥ずかしいことに、古典の方にはあたりまえの事が、当時の私にとって古典の勉強は疑問の連続でした。中でも一番の疑問は「同じ曲の同じ場所をお稽古しているのに、なぜ毎回違う事を言われるのだろうか？」でした。

師匠に質問したところ「当たり前よ」の一言。ますます私は混乱してしまいました。

見かねた師匠の一言は「この曲はどんな人達が作って伝えて来たのか考えなさい。本当に伝えたいことは楽譜にはない」でした。

考えてみると、古典は検校達が音と声だけで伝えて来た音楽

TNBのおれっぴん話⑩

三味線演奏家 (http://ameblo.jp/tnb-zz/) 田辺 明

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音や音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があったり(なかつたり)します。

先日、京浜東北線で川崎方面に向かっていたのですが、秋葉原の時点で運転見合わせになってしまいました。長くなりそうなので、山手線で品川まで行き、そこから京浜急行線に乗り換えました。

京浜急行線(略して京急)といえば、車両が発車・加速する際にエンジン音が「ドレミファソ」と聞こえる「ドレミファインバータ」が有名です。これはインバータやエンジンからどうしても出てしまう音を意図的に音階に

であり、楽譜で伝わった訳ではありません。音楽を始めた時から楽譜があり、「曲は楽譜で習得する」ことが当たり前と想っていた私は、いつのまにか古典も楽譜に忠実に演奏する事ばかりを考えていました。

楽譜は確かに素晴らしい道具です。何百年も前の曲が今でも弾けるのは楽譜のお陰ですし、大合奏も楽しめます。現代曲を弾く時は「楽譜をよく見なさい。全てが書いてある」と言われます。

しかしいつの間にか、口伝で受け継がれてきた古典ですらも楽譜に頼って演奏していたことに気づかされました。

あれから数年後の、先週のお稽古の録音を聴いてみて、変化の無さに愕然としました。

楽譜にして二〜三ページでお稽古は終わり、師匠の最後の一言は「曲を体に入れて来るまで次には進まない」です。

今改めて、古典の勉強は一朝一夕にはいかないものだと痛感しました。

しかしこの奥深さも古典の魅力のひとつだと思います。

してしまつたという装置です。実際には「ファソラシドレミファソ」のようです。

高速道路では、路上のザラザラした滑り止めの部分を通過すると三三七拍子に聞こえる場所があります。下り坂や平坦ばかりのような特に注意を促したい場所にあるそうです。他にも知床旅情や阿波踊りに聞こえるその土地ならではの場所もあるそうです。

スウェーデンでは、駅の階段をピアノの鍵盤に見立ててペイントし、歩くと実際に音が鳴るようにしたら、階段の利用者が66%増加したそうです。

日常生活において何の気なしに聞こえてくる音や音楽に気を留めてみると、音楽的・楽典的にさまざまな発見があります。

邦楽英単語講座・その十一：指すり・膝ゴム



Finger Guard (It can be moved to different positions. A player puts on between thumb and index finger.)

Rubber Mat for your Knee

(This is a piece of rubber that prevents a player from slipping.)

Translated by noriko morikawa
Illustration : urara okuda

◎あつがき◎

レニ・リーフェンシュタールというドイツの女性は、ベルリンオリンピックの記録映画『オリンピック』を作ったため、ナチのプロパガンダに加担したとして戦後長く黙殺されていたが、後に写真家として有名になった。アフリカのヌバ族の写真は日本でも話題になったから、おぼえている人もいると思う。

彼女にはもうひとつの顔があった。百歳を越えても現役の世界最年長のスキューバダイバー。七十歳を過ぎてスキューバの免許をとるために、六十歳だと偽ったのは有名な話。

日本人は(アジア圏はそうなのかもしれないが)年齢にこだわりすぎる。年上を敬うのはいいことだが、年齢によって人を決めつけるのはよくない。海外では日本ほど年齢を気にしてないようで、四十歳を過ぎて大学に行くなんて話も決して珍しくない。いくつになっても、本当にやりたい事があつたらすぐに始めればよい。ごちゃごちゃ言う人がいたら、時には年齢をごまかしたつて、ちつともかまわないのだ。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお